

文学士・神学士

藤 木 正 三

旧制高校を卒業して関学文学部神学科三年に編入学したのは昭和二五年である。入学直後の八月、神学科が神学部に移格する事が決定したが、文部省の認可は昭和二七年であった。だから私は順調にゆけば、文学部神学科最後の卒業生になれたのである。ところが、学制改革に伴う履修課目の相違で二年間では卒業させてもらえず、三年間在学して昭和二八年に卒業、新制大学神学科の第一回卒業生になってしまった。文学部に入学して神学部から卒業したのである。「神学士なんていやだ。文学部に入学したのだから、文学士で卒業させて欲しい」と言った友人がいた。私も全く同感であった。

入学試験の時、口頭試験で「将来牧師になるつもりか」と問われ、「その気持はない」と答えたら、「何になるつもりか」と再度質問され、「そういうことは考えたことはない」と答えた。私としては極く正直に答えた積りであったが、気不味い雰囲気になった。牧師になるとかキリスト教に関係した仕事に就くとか、そんな将来の職業のことなど全く念頭になかった。

弁証法的唯物論、主体性論、宗教的実存などが、熱っぽく語られた時代であった。それらの思想的潮流の渦を産み出した戦後の虚無の中で、本来的に自己自身たりうる道を求めていたの

が、あの頃の精神的状況であった。何かになるために文学部神学科を志したのではなく、いかに生きるかを求めて志したに過ぎなかったのである。いつの時代でも神学生というものは若干そういう傾向を持っているとは思いますが、戦後の拡大された自由の中で、それを受けるはずの人間そのものへの反省が、その傾向を倍加したように思う。主体的真実を求める実存的要求は強かった。そういうものにとって、神学部という、牧師・伝道者のためのプロフェシヨナルスクールの感じのするものは、なじめなかったのである。これは、当時の学生に共通したものではなかったかと思う。旧軍閥系の学校に学んだもの、理科系学校に学んだもの、旧制高校に学んだもの、既に大学を卒業して社会で働いていたもの、シベリヤ抑留体験を持つものなど、年齢にしても十歳位の違いのある種々雑多な学生が、それぞれに生きる道を求めて入学してきていたのである。文学部神学科は、そういう精神的彷徨の場所として、学生が一時身を寄せ、やがてそれぞれに通過してゆく、直接職業に結びつかない、自由な、ある意味では大変贅沢な、自己をみつめる場所であった。少くとも私にとってはそうであった。そして、何人かの人々は中途退学し、卒業しても別の道を志していった。それは、背信でも脱落でもない、自分の位置を見さだめての転進であった。

神学部が開設される前、同窓生有志は「時代の要請にこたえるために短期伝道者養成講座を開催することが望ましい」という希望を出していたそうである。しかし、大学理事会は、狭義の教派的神学校の再建ではなく、アカデミズムやエキキュメニズ

ムを重視した大学程度の神学部の新設を目指し、同窓会有志の希望事項はこの神学部の実体としない方針を定めたといわれる。「神学研究」一一八号の鼎談「神学部の歩みから」。このような大学当局の気構えを学生共は知るよしもなかった。しかし、そのような巾の広い、新しい行き方を模索していた大学の努力に対し、荒廃した自我をもてあましながら究極の人生態度を求めていた不肖の学生共は、今にして思えば従来の教派的な神学生像からはみ出した文学部生的生き方で、はしなくも応えていたのではないか。

「牧師になる気はない」と答えて入学し、「文学士の方がよい」と眩きながら卒業して三十年、若い日の求めの線上を迷いながら恥多い歩みが続けて今日に到った。しかし、振りかえってみればいつの間にか教会に仕えての三十年となつてしまっている。まぎれもなく神学士の三十年である。思えばなんと良質の神学教育をしていたたことであろう。先生方のお名前を列記させていただく。アウトターブリッジ（宗教史・教化学・ギリシヤ語）、松木治三郎（新約学・説教）、片山正直（宗教哲学）、相浦忠雄（旧約学）、山永武雄（教会史・教理史・説教）、原野駿雄（新約学）、ノルマン（キリスト教倫理学）、ブレイ（新約原典）、小林信雄（世界教会学）、長井齊（教会音楽）、溝口靖夫（キリスト教社会倫理学）、土山牧羔（宗教教育学）、田中理夫（ヘブル語）、長久清（聖書概説）。そして、讚美歌も碌に歌えないものを集めて、自宅で特訓をして下さった理工科教授の田中彰寛。感謝は尽きない。

文学士・神学士（藤木）

（現 日本基督教団 京都御幸町教会牧師・

1953（昭28）年、第一回卒業）

思い出

松 永 晋 一

私は昭和二十六年、当時の文学部神学科二年に編入学した。相浦忠雄先生と実方清先生が面接して下さったことを憶えている。試験の前日、相浦先生が教授食堂で昼食をご馳走して、祈つて下さった時、感動したことを忘れることができない。城崎先生は当時は助手をしておられて、合格の電報をうって下さった。出身校での履習単位を可能な限り多く認定して下さいたので有難かった。

ちようど、松木治三郎先生、松村克己先生、山永武雄先生が教授に就任された年で、それぞれの先生方との出会いは私にとって貴重なものであった。松木先生は、成全寮の玄関でお迎えした時、この方が松木先生だなど、すぐわかった。寮では、朝早く誰かの祈りの声に目をさますことがよくあった。土曜日は、翌日の教会出席にそなえて、寮母さんからアイロンを借りてズボンを押スしたり、試験前になると通学生も来て、誰かが講義をしたりしていたことが思い出される。

松木先生の授業は、はじめの年は新約釈義で、最初ローマ書

三五七

の講義をして下さった。チャペルの西側の教室で、二十名くらいの学生が受講していた。パウロの言葉を説き明かす先生の声には毎回何か凄い気迫が感じられ、内容の魅力と共に圧倒される思いがしたのは私一人ではなかったと思う。ときどき、「あのー、先生」と言っただけで手を上げ、「もう少し、ゆっくりおっしゃっていただけませんか」と注文をつけていたのは、たしか有名なK・U子さんであった。

私にとって忘れられないのは、新約釈義のリポートでガラテヤ書三・一―五を書いた時のことである。私は事柄をはっきりさせる積りで盛んにバルトを引用した。またルターのソラ・フイデを強調した。松木先生はそれを高く評価して下さいと共に、バルトよりもまずパウロに聞くように、と注意して下さい。問題をとらえて神学的に思索することの喜びと共に、著者自身の意図を史的批判的に正確に聞きとることにより、自分の前理解が修正されて《事柄を新しく理解する》という聖書の読み方を松木先生から学ばせて頂いたことは私にとって何にもまして大きな感謝である。

松木先生の授業は、新約釈義に続いて、新約神学で、研究史、方法論をめんみつに取り扱われたあと、イエス、原始教会のケリグマ、デイダケーに続いて、先生の学位論文となった「人間とキリスト」の講義をお聞きすることが出来た。ゼミではブルトマンの新約神学第二巻をテキストとし、とくに私たちのクラスは、パウロの神学を読んだ。原書ととり組む最初の経験であった。

松村克己先生は、専門書講読でフォーサイスの *The Soul of Prayer* やアルトハウスの *Grundriss der Ethik* に続いて院の時はテイリツヒの *Systematic Theology* をテキストとして、自由に広く豊かな解説をして下さった。学生の発表が準備不足でもたもたしていると、眼鏡越しにジロリと見つめておられた先生の暖いまなざしと共に、境界線のない先生の額と頭が今もありありと思ひ出される。組織神学では、先生独自の神学通論、各論の内容をお聞きし、とくに啓示論で、原啓示について学ばせて頂いたことが私には非常に有益であった。

山永先生の講義は僅かしかお聞き出来なかったが、寮で夜バルトの難解な部分を個人的に質問し教えて頂いた。相浦先生の知恵文学、印具先生のアンセルムス等、先生方のライフワークを教授して頂いたことは有難いことであった。ほかにも先生方、友人たち、成全寮での懐しい思い出、神学部学生会の初代幹事長をしたことなど、思い出はつきないが、字数制限を超えるので、やむなく割愛させて頂くことにする。

(現 聖和大学長・1954 (昭29) 年、第二回卒業)

「それは困ったな」

指 宿 文 一

「それは困ったな」。そうおっしゃりながら、M課長(兵庫県水産課)はジロリと目を上げた。一九五四年(昭和二十九年)

三月のことだった。

「此の三月末で、辞めたいのです。関学神学部編入試験に通りましたので……」と言う、僕の突然の申し出に、M課長は無然たる面持をなされた。

五年前の二月、一九四九年、国立鹿児島水産専門学校漁業科（現・鹿大・水産学部）の第一回卒業生として、此のM課長が未だ係長の頃、御推薦を頂いて、兵庫県の採用試験を受け、爾来、水産技師として五年間育てられたところであった。

後任への業務引き継ぎという名目で、僕の学生復帰応援のために、それから半年間、辞職は延期された。

従って、神学部二年度生に編入されたものの、午前中は学生として講義を受け、午後は県庁に出かけて行って水産技師の仕事をするようになった。そういうことが半年間つづいた。その当時、履修指導をして下された方が小林栄助手（？）つまり現在の神学部長であられる。

僕の変則学生という申し出に、小林栄助手も大変困られたようであった。松村克己教授が学生主任か教務主任であられたのかよく判らないが、僕の変則学生申し出を聞いて下さった。「それは困ったな」とおっしゃりながら。

当時は既に敗戦後の混乱期が終り、世間も大学も秩序がととのい始めた頃だった。敗戦後数年間は、大学も復員帰りの元陸軍中尉とか海軍兵学校の出身者がザラに在学していて、変則学生も当り前だったのだが。

「それは困ったな」とおっしゃりながら、松村教授と当時の

「それは困ったな」（指宿）

小林助手の好意的見のがしによって、僕は大学生兼水産技師ということを半年間つづけさせて頂いた。

一九五四年（昭和二十九年）十月から、僕は純粹（？）の大学生になれた。二十七歳だった。生活費の面も、学業の面とりわけ英語・独語も常に最低状態であった。当時、医師の夫を結核でなくした後、自身も結核療養所から退院して行く先のなかった姉を小学校一年生の娘と一緒に僕と弟の二人で引き受けて、県営住宅の一戸で共同生活をしていた。

県庁を辞めて、神学部に行くという僕の願いは親戚中から反対された。「それは困った。姉の生活を誰がみるのか」。之が僕の周辺の声だった。

しかし、神学部の先生方やその御家族の方や先輩方や、母教会の宣教師のおかげで、生活と学業を何とかつづけることができた。今にして思えば、神さまの御あわれみであったとしか言いようがない。

松村教授から一人の女の子の家庭教師を委託された。大学院を出るまでの五年間の神学生時代、此の女の子抜きにして語ることができない。心臓に先天的障害を持っているため、身体も知能の発達もずいぶん遅れていたが、しかし、美しい魂の持ち主であった。毎週土曜の一日、此の少女と一緒にいる時、僕は安らぎを、此の少女から与えられた。

神学部の勉強は仲々きびしかった。とりわけ、独語に関しては辞書のひき方も忘れてしまった状態で、教養課程二年目のクラスに編入させて頂いたので、まるつきり文学部学生との共同

授業は判らなかつた。独語の授業中指名されて、「できません」と答えた時に、恥づかしくて顔も上げられない頃であった。

今も僕の押し入れに、古くて重い黒のオーバークートがある。H・W・アウタブリッジ先生のものだ。此の先生の英会話の授業も、半年間全くチンプンカンブン判らないままだった。それなのに最低でも単位を下さった。

「それは困ったな」と言われた一人の人間を神は見捨て給うことなく神学部の諸先生方を用いて今日あらしめた。「栄光只神に在れ」。

（現 日本基督教団 甲子園教会牧師・

1957（昭32）年、第五回卒業）

成全寮野球部出身の回顧

前 島 宗 甫

関西の都市産業宣教に関わる仲間たちとパーティーをしたりして興にのると、私はよくプロ野球南海ホークス応援歌をうたわされる。セミナーなどで若い人たちを前にしたときなどは、南海ファンの拳手を求めてみる。まずいいない。いてもごく少数である。巨人、阪神がやたら人気のあるなかで、「ホンマに少数者の問題、被抑圧者の問題を担うつもりなら、南海を応援すべきである」などと能書までつけてうたうのであるから、牧師

稼業もイヤほど身にしみてしまったなどと思ったりする。

物ごころついた頃から野球が好きで、少年ホークスに入り、高校まで野球を続けていた。今でも大阪球場の無料パスを手に入れては（教会員の親族に南海球団のマネジャーがいる）南海応援団の席で、パツとしないかつての名門チームに嘆息まじりの声援をしている。

神学部に入って、成全寮で五年間を過した。入寮したとき、ド肝を抜かれたことがいくつもあった。まず先輩の偉さである。部屋を訪れると見なれぬ書籍がギッシリとミカン箱などにつめ込まれ、本棚などがかたむく程である。アノ独語の花文字には感動した。煙草をくゆらせながらそれを読むさまなど拝見して、これはもう教授より偉くみえた。入寮歓迎のストームに見舞われ、そのときに聞かされた某先輩の説教は、哲学者、神学者の名前や高説が珠玉のごとく語られ、ただただ有難かった。毎朝の寮拜で讚美をうたうとき、「ここはこううたうべきです」と毎朝のごとく指摘されるグリー中退の先輩にも目をまるくさせられた。いろいろと、実に多彩な人びとがあふれていたのである。

このなかで自らの活路をひらくのは野球しかない。幸い同級生に内藤暁君がいた。のちに藤原一二三、菟原望両君が入ってきた。私を含めてこの四人が野球部の経験者である。寮費か神学部自治会費だったか忘れたが、日本橋の五階百貨店にグローブやミットを買いに出かけた。寮生と通学生の対抗試合を皮切りに、当時ははなやかだったインター・セミナーの一見アカ

デミック風の退屈なプログラムに割り込んで、同志社神学部との交歓試合をはじめた。

高校時代リリーフエースとして活躍した菟原君の速球はちょっと素人には手が出なかった。同志社とは26―0で大勝した憶えがあるし、大学祭に行われた学院内対抗試合でも、中学部野球部を破ったりして二年連続優勝した輝かしい記録をもつ。当時優勝記念にもらったバックルやタイピンは、全国制覇をとげたクラブに贈られたものと同じであり、今でもなつかしく用いている。現学長の城崎先生もチームの一員であった。「今日は楽勝」とみた試合には一塁手として登場、喜々としてボールをさばいておられた。

だから寮生時代は、あの上ヶ原のフィールドを十二分に使い楽しませてもらった。最初にド肝を抜かれた「本」の方はマアホドホドではあったが、未だに「本」よりはむしろ「フィールド」の方が得意な状態が続いている。

先日、受験期を迎えた我が子を伴って成全寮を訪ねてみた。聞けば間もなく取りこわされるそうである。娘に「あれがオヤジのいた部屋だ!」と指さしても「ああソウ」とそっけない。神学部の卒業生会を、あの寮にちなんで「成全会」と呼んでいる。成全寮のはたしてきた役割は大きかったのではなからうか。刺戟されたり教えられたりした寮生活がなかったら、自分は今、牧師になってなかったかも知れんかなと思ったりもする。成全寮が神学部の手をはなれてしまった今、回顧すればなにやら「死んだ子の年齢を数える」ようなイヤな感じがしないでも

成全寮野球部出身の回顧 (前島)

ないが、しかし、新しいこれからの「成全寮」が生れないものだろうか。生活やさまざまな活動が共にできる場のなかで、宣教師が育てられていくことは、すばらしいことではないかと思っている。

(現 日本基督教団南住吉教会牧師・

1960 (昭35) 年、第八回卒業)

学生時代の思い出

金 田 弘 司

いつの時代でも、そうなのだろう。キリストを知る者は、その時代の苦渋の中に身を置いて生きるほかはない。神学生の時代とて、例外ではなかったように思う。

すでに妻帯し、二十五歳を過ぎて神学部に入學したわたしは、自分の敗戦時の体験もあって、時代の動きには敏感であった。世の中は繁栄へと向っていたが、貧しく、飢えの時代を歩いて来た者には、上ヶ原の空気はとて甘かった。その甘さに酔おうとしていた。

やがて、六十年安保の嵐が、学院にもおしよせる。じっとしておれないものがあり、何人かの友と語って「平和と民主主義を守る会」を結成した。又、神学会の中にも「神社問題小委員会」を設けて、ヤスクニ問題への注意を呼びかける小さな資料集を

三六一

つくり各方面に発送したが反応はにぶかった。一九五九年のことである。

成全寮は、夜更けまで、激論を交わし、怒り、苦悩して心を焼く青春の道場となる。時には、怠惰な若者たちの悪い温床の如く見られたこともあったろうが、この寮で、未来の伝道者らの魂は、じやがいもを洗うようにゴシゴシと洗われ、パン粉をこねるように豊かに練られ、育てられたと思っている。

内の炎は、ただちに外に燃えた。神学部学生会の活躍ぶりは圧巻だった。十字架を押し立てて絶えずデモの先頭に立った。その頃はまだ、かぼそくしか歌えない国際学連の歌に比して、チャペルでできたえた「見よや十字架の旗高し」は他を圧した。多くの教授方もデモに加わった。デモの嫌いな先生もいた。われらは教授の悪口を言いつつも、学生に注がれる背後の暖かな目を疑いはしなかった。

樺美智子さんが死んだ。彼女と同級のF君が哭いた。毎日デモに行かなければならなかった。ギリシャ語の単語を覚えながら、フランスデモの輪をひろげた。

やがて全国に波及する運動の波は、この小さな活動をも呑みこみ、押し流して行く。神学部で闘争の起るのは、わたしが卒業して四年後である。

熱病ではなかった。あれから二十余年、キリストの時の充満に向っての苦難のたたかいは今も続く。且つての活動家たちが次第に影をひそめて行く中で、しかしわれらの「己が身をもって主の苦しみの欠けたるを補わんとする」わざはこれ

からも続く。

こう語って行くと、まるで苦節の六ヶ年という印象であるが、そうではない。有難いことに、わたしは神学校生活を満喫させてもらった。恩師や先輩、友人らの愛と助けの故である。

四季刻々、美しくいる合いを染める上ヶ原のあの樟の若葉のように、それは変化に富んだ日々であった。四月の始業講演に向う寮からの道には、いつも新しさと期待があった。今も夢でうなされる眼鏡越しのドイツ語も、二十五過ぎて、やっと学問の場でありついたわたしにはかけがえない思い出である。どの授業も、一方に「今日の教会の問題に真に応え得る神学とは何なのか」という課題をかかえつつ、着実にわたしの何ものかを蓄積して行くものがあつた。

夏期休暇後の毎年の千列の修養会は特に楽しかった。クリスマスのおすきやき会では万才をやり、学友七人と夙川に塾を開いてパンのためにも全力投球をし、関西労伝のインターンとして現場の問題にも触れ、インセミで全国に友人もつくった。

優秀な学生ではなかったが、人生の辛酸が大学院の語学認定試験に落第した他は、一課目も単位を落さない阿呆なきまじめさぶりを堅持させた。成績は、終始「中の下」程度をゆずらず、学問では年の功が物を言うようなことは何一つなかった。

こうして卒業後二十年、一冊の本も著せず、一文の論文も草せず、唯ただ教会と社会に仕え、働いて、今日に至る。

今年は学部設立三十周年だという。この三十年の歩みの中に、われら一にぎりの歩みもあつたことを感謝しなければならぬ

と思う。

(現 日本基督教団 大分教会牧師・

1962 (昭37)年、第十回卒業)

神学部で学んで

相 浦 和 生

(一)戦後、神学部が再開されたのは一九五二年。その時、私は中学部に入学したくて、そのくせろくに勉強もせず、ただイライラだけしていた小学校六年生であった。今、文学部教授の畑道也さんは私の一年先輩なのであるが、時折り私と遊んでくれた。その彼が中学部の真新しい制帽をかぶって私の前を走りまわるので、中学部への思いは増すばかり。これが私が関西学院と係わる原点である。父が神学部勤めていたこともあって、私は度々学院を訪れていた。その頃の楽しみといえば、神学館の現在は事務室になっている部屋が当時売店で、そこでお菓子を買ってもらったことであった。中学部に入学してからも一年生の時には数度、神学部を訪れた記憶がある。そこで、(当時の)学生が先生に(勉学のこと)叱責されている光景に時折り出くわした。今から思えば、神学部再開の頃だったので、先生方も張り切って居られたのだと思う。その頃に比べると、最近特に紛争以降は、先生に、本気で学生を叱責するという迫力

学生時代の思い出 (金田)

が欠けているのではないだろうか。

(二)中学部二年生頃から高等部の三年間はほとんど神学部には行かなかったように思う。その中で一つだけ強烈に覚えていることがある。高等部三年の時、私は吹奏楽部に居たのだが、一度、神学会と軟式野球の親善試合をしたことがある。左腕投手菟原望さんを中心にした神学会チームは当時の学院内のサークルチームでは最強で、我が高等部吹奏学部チームが勝てる訳はなかった。試合には負けたが私はこの日を忘れることが出来ない。というのは、父の息子でただ何んとなく神学部に進学する雰囲気であった私が、この先輩達に接して、神学部入学を決意したのである。この先輩方は全員「成全寮」の寮生でもあったので、神学部に入學してから大好きな成全寮にはよく通った。

(三)神学部に入學したのは一九五八年四月であった。神学部在學六年の間には様々なことがあって、想い出も沢山あるが、これは同窓の方々の経験と重なるので、紙面の都合も考えて省くことにする。

(四)話とはぶのであるが、「神学部史」の時代区分については多種多様の意見があるだろう。「神学研究」第二八号の鼎談「神学部の歩みから」によると、時代区分は次の三期に分けられる。第一期私立関西学院神学校時代(一八八九―一九二二年)、第二期関西学院神学部時代(一九二二―一九四四年)、第三期関西学院大学神学部時代(一九五二―現代)。その間、一九四二年には日本西部神学校に統合され、翌一九四三年には日本基督教神学専門学校に合併され、関西学院から神学部が姿を消す。

三六三

そして、一九四八年に関西学院大学文学部神学科が新設される。以上のような神学部 of 歴史の流れの中で、何故に一九五二年の神学部開設（関西学院史でいえば再開）だけをとり出して「三十周年」を祝わなくてはならないのか、私は少々理解に苦しむ。日本のプロテスタント史を視点に置くならば、一九四一年の日本基督教団成立と一九六九年以降の神学部紛争こそ「神学部史」の竹の櫛目となるべきではないのだろうか。外国ミッションによる日本伝道の果実としての関西学院が、否関西学院大学神学部が、羽音が日本の風土に土着する折にさけることのできない摩擦から目をそらせて、ただ年表的視点に重点を置くならば、私は余り意味を見出さない。昨秋の「三十周年」においてこれらの事が欠落していたとはいわない。しかし、伝わって来ないのである。

(五)一九五二年から三十年、私も教会者のはしぐれに居る。それでも、何んといつても今、主に在って生きることが出来るのは、関西学院、そして神学部のお蔭だと感謝している。

関西学院と神学部のご発展を祈りつつ。
（現 日本基督教団 神戸平安教会 牧師・

1963（昭38）年、第十一回卒業）

往時の思い出

日下部 勝

この度、関学神学部が新制大学の一学部として開設され、満三十周年を迎えられたことを心よりお祝い申し上げます。

今日まで神学教育と牧師養成という重責と使命を果され、多数の有能な働き人を送り出して来られたことは、卒業生の私共にとつても大きな喜びであり、又誇りでもあります。

更に神学部の今後の御発展を祈り、その御働きの為に祈らせていただきます。

さて満三十周年にあたり「往時の思い出」をここに記すことが出来る光栄を誠に感謝しております。

私が一年生に入学した時、五人という誠に数少ないクラス仲間でありました。そのうち三人（土居通昭兄、中森一信兄、そして私）が牧師の二世で、この三人の父親も共に神学部の同窓でもありました。昨年の秋に召天された原野駿雄先生は、入学時にご健在で奇くも私共三人は、父と子二代に渡って先生より教えを願うことになったのであります。

先生は、このことを大変喜ばれ私共を自宅に招いて大変なごちそうでもてなして下さいました。先生は、父の時代の神学部の様子、牧師の生き方、教会の問題等についてユーモアを混えてお話しして下さいたことは今も忘れ得ぬ思い出の一つとなつ

ております。この様な心あたたまる御配慮によって、入学時の緊張と不安から解放され神学部生活を始めることが出来たのであります。

さて神学部での生活は、卒業するまで勉学に関しては少々辛く厳しいものであります。語学一つとってみても正直なところ重荷であり、毎日語学に追われていたようです。ただ生まれつき欲が無かった方で、合格点さえもらえばと語学に向かったのです。又語学と共に聖書神学、組織神学など他の諸神学に対しても、神学を志さす者に必要な厳しさと誠実さをも教えられたことは大きな感謝でありました。このことは現在の牧会生活に大きなプラスとなっております。私が今後共牧師として御言を語るかぎり決して失われてはならないことだと肝に銘じている今日であります。また当時なかなか息を抜く時が無い中で肉体的、精神的にリラックスになれる時もあり、私を感じるかぎり、この時ばかりは神学生全員和気藹々のうちに楽しく過ごることが出来たのです。それは全学部対抗野球大会で神学部は常に優勝かそれに近い成績を残したように思います。私など、どちらかというところ「野球の虫」の部類に属する方で下手にもかかわらず率先して参加したものです。当時の学生は不思議にも野球などスポーツに強く器用な者が多かったのであります。又同志社大学神学部との年一回の交換会に於いて行われる対抗野球試合は互いに名譽をかけライバル意識をかりたて熱き戦いをしたものです。勝っては騒ぎ敗けては悔しがり、全く幼な子の如く純粋な神学生でありました。これも楽しい思い出の一つで

往時の思い出 (口下部)

あります。

在学中多くの神学生との出会いを経験しましたが、今忘れ得ぬ一人の友を思い起こします。その方は国鉄を定年で退職せられ、二年生に編入して来られた鎌田兄(現徳島在住)ですが、人生の後半で召命を受け、若い私共と四年生まで一緒に学ばれたのであります。兄は常に私共を様々な点において励まし良き人生の相談者であって下さいました。年齢の点で若い私共から比べれば、神学部の勉学は人一倍御苦勞をされましたが、信仰に支えられ立派に学部を卒業、郷里徳島で牧会されていますとお聞きしています。兄と共に神学部で生活できたことを感謝し、いつまでもお元気で主の御用にあたられんことを祈りたいと思います。

この他に多くの方々との出会い、又その方々との六年間の貴重な体験など数多くありますが、ここに記すことが出来ないことを誠に残念に思います。

神学部で私共を導いて下さった諸先生方、又交わりをいただいた同窓の一人お一人の祈りを感じ「往時の思い出」を心にとめ乍ら大分・玖珠の地で牧会の任にあたりたく思っております。

最後に神学部の上に主の豊かな御祝福が在らんことを心よりお祈り申し上げ「往時の思い出」といたします。

(現 日本基督教団 玖珠教会牧師)

1964 (昭39)年、第十二回卒業)

思い出

八十川 昌 代

私が神学部に進んだのは、一九六二年から六八年であり、神学部三十年の歴史のほぼ中期に当たります。それはまた、一九六九年、東大に端を発し全国的に波及した大学紛争の前夜の時期でもあった。この年を境にして、神学部の流れも、大学の制度やカリキュラムも改変を余儀なくされ、そして神学生気質も変わってきたように思われる。そういう意味では、私たちは、紛争前の旧体制の神学部の最後のクラスであった。

私が神学部に入學した年は、松村克己先生が神学部長に就任され、神学の基礎学としての語学教育が一段と重視、徹底化された。その修得、卒業後の活用の度合は別として、とにかく厳しい教育の恩恵に浴したように思う。英語はもとより、ドイツ語、ギリシャ語、ヘブル語、そしてラテン語。神学部六年の課程で、新たに三ヶ国語、乃至四ヶ国語を学習することは、相当の努力と忍耐を要するものであった。著しく読書時間が裂かれ、思考力が減退するという焦りと苛立ちを感じながらも神学生時代の少なからぬ時間がそのために裂かれた。

この無味乾燥とも言える語学の学習の中で、日・ギウンター先生のギリシャ語は、特にすさまじいものであった。ドイツ人の先生が短期間に日本語を修得されて、日本語で講義されたが、

三六六

いつも始業の鐘が鳴る数分前にすでに教壇に現われ、後から教室に入ってくる学生を待ち、鐘が鳴り始めると同時に授業開始、まずは学生に練習問題を課し、順番に当てて行かれる。少しでも答えに詰まると「あなた、できません。大丈夫です」と答えるまで待たれるのである。そんなわけで、自分一人が怠けるとクラス全体の迷惑となる。先生の熱意、それだけでなく誠実さ、暖かさに触れて、クラス全体が否応なしに学ばせられるという風であった。

夏の休暇中にも、一週間に一度の割合で練習問題を課し、それを郵送させ、丁寧に添削して返送されて来るのである。こんな風にして、謂わば私塾的雰囲気の中でギリシャ語を教え込まれたのであった。その授業内容は、単にスパルタ式というのではなく、先生の人間としてのあり方、生き方を余すところなく示す時でもあった。

当時、ボンヘツファアの著作が次々と翻訳されていたが、そのうちの一冊をクラスの読書会で取り上げ、先生に、ドイツ教会闘争の歴史について語っていただいたことがあった。第二次大戦下、先生がソビエトに抑留された時の体験を踏まえて淡々と語られ、私たちに深い感銘を与えた。ドイツのキリスト教会を嵐の中に追い込んだあの教会闘争の時代を生きた若い日の先生の姿を想像して私たちは心に迫るものを覚えた。先生の神学への姿勢、人間としての謙虚さ、他者を生かす暖かさは、その時の体験と無関係ではないと思われる。

私の神学生時代を回想する時、ギウンター先生の思い出が爽

やかによみがえる。それは先生の厳しさの中にある暖かさ、また愚直さのためであろうか。

今日、コンピュータによって多様な情報が処理され、ワード・プロセッサによって論文が書かれる時代に到っている。機能性、効率が重視優先され、どうかすると人間の問題は傍らに押しやられる。この時代の中で、大学、神学部のあり方も、時の流れに棹さすことは容易ではないと思われる。

ただ、神学部三十年の歴史の中にある良きものが大切に残されて行くように、そして、神学—人間にかかわる学問の場、現代人のいやしにかかわる牧者養成の場に、人間的な心のふれ合い、暖かい師弟関係、共に時代を生きる学徒の交流が生き続けて行くことを願わずにはいられないのである。

(現 日本基督教団 芦屋西教会牧師・

1966 (昭41)年、第十四回卒業)

往時の回顧

山城 順

神学部に入學した時から二十年、現春日東教会に着任して十四年の月日が私のからだのすみずみに刻まれているように思う。「往時の回顧」ということでは、忘れかけていることもあり、忘れてはならないこともあるかと思うが、私の回顧を語り、そこから課題と展望を示されれば幸いと思えます。

思い 出 (八十川)

私は大学院に入った時、二年間のボーナスをもらったような気持ちになり、ホッとした。牧会の未知の世界に入るには若く、不安であったから、貴重な二年間を有難く思った。いよいよ卒業する年度の六八年から六九年にかけて、全国的に起こった学園闘争に、関学が、そして神学部が係わりをもち、しかも、六〇年安保の時のように自分の持ち場を出て街頭や国会議事堂などをデモンストレーションして闘った闘いを自己批判し、七〇年代には内部に、自分の立っている場にとどまってそこから教育体系を問い、学問を問うていった質的な深まりに、私は衝撃をうけた。

学部で構成されていた学生会が、神学を問う問いを圧倒的なスト権確立後、バリケードを構築して投げかけた。大学院生十数名は二日間どのように受けとめるべきか議論した。私は卒業して牧会に出ても、このような問題に対処できないと判断したので、翌日の夜からバリケードの神学館に行き、乞うて中に入ってもらった。

私たちはバリケードの中という一つの極限状況のなかで、ベトナム戦争に一つの焦点をもつ世界と日本、その中の教育と産業の関係、そして国家権力の構造をちょうど針の穴から天を見るように、非常に確かに見た。全く見えなかった私の全体が、バリケードの中から見えた。チャペルで毎日礼拝を行なったが、ルターが我ここに立つ、この外に立つべき場はどこにもないといったその気持は毎日私の気持でもあった。私は恐れなくなつた。悩みの種であった赤面症もすっかり直って、あの体験の実

益を感謝している。講壇の十字架の置き物を、チャペルの後方に置いてそこで礼拝をしたが、そのままにしていたのでしよう、後にブレイ教授は十字架をひきずり降して無礼だといったかどうか、激しく怒られたと聞いた。

いろんな妨害や障害があったにもかかわらず、当地で十四年の牧会に仕えることは奇しき導きによるといふほか説明できない。

さて、私が入学したころ神学部は戦後の学制改革により再出発して十年という時であった。伝道者になる者に対して神学の学問性の必要が強調されていた。それは戦前の神学部では伝道者には信仰の訓練が第一で神学は二の次だという神学軽視の風潮があつて、これに対する自覚的な反省によるアンチテーゼであつた。

私はこのような神学部形成の努力が今日の神学部に生きて流れ、伝統になつていふと思う。

その神学が、あの激動と混乱のなかで、一つの道を示し、苦悩のなかから問う学生に対してM教授のごとき審問官としてではなく、共に考え、共に歩むということを為したならば、どんなに救われたことか、その貴重なチャンスが大きな実りをもたらしたることか、今は残念に思う。

一 神学部が自己充足した神学を誇るといふことはありえず、教師検定試験との関わり、牧会に出てから学んだ何が牧会を支えるかという仕方、神学は教会に仕えつつ日本と世界に一つの方向を指し示していると、私は思う。それは感じとられるも

のだと思う。

私自身学びたかった聖書と釈義については学びを感謝している。関学神学部にはそうした聖書神学の独自のものがある。そういう「技術」を教えるのだと強調されていた。「技術」を駆使してもっと深く高いものへと学問の努力をしてもらいたい。

私は牧会のなかの聖書神学を一貫して探り、人は一生に一冊の本を残すといわれるように、是非ともあらわしたい。そういう仕方、神学部のあの時からの問題に答え責任を全うしようとしている。

神学部に対して願うことは、(一)教師試験に(対する対策を、予備クラスでも何でもいい)積極的に係わり、対応してもらいたいことです。神学教育に関する問題性と確信が見い出され、受験者のためになる。

(二)学んだことが役に立つという点から、かつてのカリキュラムに必須であつたギリシャ語、ヘブル語、できればラテン語の回復を願う。辞書をひいて年に一度でも、そのように読めるならば、どんなに励みになるかを思うからです。

(現 日本基督教団 春日東教会牧師)

1967 (昭42) 年、第十五回卒業)